月卿雲客妬歌合　建保二年九月盡日

題

河落葉　寄鳥戀　深山雨

作者

左

女房

權大納言藤原朝臣良平

從二位藤原朝臣家衡

右近衛權中將藤原朝臣家良

從二位藤原朝臣基良

右近衛権中将源朝臣通方
参議左近衛権中将藤原朝臣経通
兵衛内侍
七條院権大夫
後成卿女

右

左近衛権中将藤原朝臣雅経
散位藤原行能
左近衛権中将藤原朝臣国通
宰相忠定朝臣

散位藤原朝臣保季
中宮大進藤原朝臣兼隆
左衛門権少尉藤原康光
文章生菅原淳頼
前播磨守藤原朝臣範基
侍従藤原光家
講師
読師
判者
宮内卿藤原朝臣家隆

一番　河落葉

左勝　　女房

なきさよりさほの川水いろなるもちる紅葉は風をよはらす

右　　雅経朝臣

神なひの山のあらしや立田川こほの秋のこゝろこの水
水の秋のいつくはあまとよりかけの紅葉身にそしむらむ

二番

左持　　権大納言

としみちはやましたゝれ紅葉ゝ川なかしてみれは秋のはてまし

右　　行能

あはれもともにさそはれて紅葉くまさに秋の波もなみたのあはれ
とみちは乃流まても思ひ出るにもなほまたはぬ秋かな

三番

左勝　　従三位家衡

嶺風のしたはそよぬ紅葉の木の葉も水上まゆらく

右　　国通朝臣

秋の色はそめぬあとゝ思ひつゝ紅葉を流すそうき浪
唐錦山はいつれぬ紅葉のはやくもうつる浪の川なみ

四番

左　　右近中将家良

こからしに立田乃紅葉さそはれてさそ人もなき秋乃くれかな

右　勝

忠定朝臣

見わたせは秋の色なる立田川ちるやみむろの山の木の葉に
木枯乃さそへは誘ふかたになる立田姫紅葉のそれそとまる

五番

左　勝

従三位基良

たつた川またにのこらぬ紅葉々をなかす山本秋をとの祥

右

保季朝臣

おちつもる(?)山ちの紅葉誘はれてもれそ乃浪も散るの千船
大井川出てゆくも名にみ筏士の流れのはやき山風乃嵐

六番

左

右近衛中将通方

山おろし吹きてしほのまかはのひとむせて白波

右　勝

兼隆

立田山おろしの風のゆふ時雨ふりそめてそめもそあけゆく
山風吹きし浦この山風ゆふ時雨さそふ川きりなかれて

七番

左　勝

宰相中将経通

梢には常もかはらぬ立田川かせそ秋なるなかれにはなかの跡

右

藤原康光

立田河うつる木末の名なからん秋をそ流す河の浪

立田河うつる汝は知らぬかけもあまたに嵐やこれに成らん

八番

左　持　　兵衛内侍

峯おろし紅葉吹おろすも立田河ゆくせもみえす紅のかさなるか

右　　菅原清頼

吹おろす嵐はつきても秋をこそ川もふかくそ紅葉のみち染

立田河ゆくせにうかふ水の秋はいそく紅葉の色をそへける

九番

左　勝　　七条院権大夫

秋も咲ちらしそ嵐は木の葉を埋む谷川の水

右　　範基

唐錦秋の名をや立田川にのこしおきて世にしられけり

唐にしき秋は流るゝ色はかりなる木の葉まかせて流る谷川の水

十番

左　持　　後藤御女

立田山梢の秋をかさねにうつしてわすれむすがくれなゐの色を

右　　光家

秋よりも紅葉の色やたつたのむら紅の木の葉の色も

峯の雲ふもとの谷のかせもくれなゐのかならむ

十一番 寄鳥恋

左 勝　　女房

なにも侘ぬ絶ぬに飛鳥のあはれとたのむも何を頼まん

右　　雅経朝臣

ねかひてし我むかしくゆりへ家にこまかきむ鴫の羽かき
鴫のたちあはらしまても飛鳥のあはれ乃里の夕くれの空

十二番

左 勝　　権大納言

あふ坂の夕つけ鳥の音たてゝなかぬ人めをしのふそ恨ける

右　　行能

らふ鳥のあかつきしきりに鳴こゑにあはれとはてた恋しさ
あふ坂の関にさはらぬ鳥の音をあはれとそなき

十三番

左　　従三位家衡

ねおもふ袖の涙のくれなゐを鳥の声そ添く山かゝるまで

右 勝　　國通朝臣

たつみの雲かくれ乃淺みにやましに杜おほえぬかくなきてあ
さ川乃かけ芦辺の浪やはるかなる浪の末は鳥甘

十四番

左 持　　右近衛中将家良

なくさめし鴫のはねかき絶てこぬよの数や袖のつゆそれ

右　忠定朝臣

艸も木もうつろふ秋のゝ山高猶や移なん霜にしほれ行を

秋の空風のはけしくまかふ風猶おさまらぬ露の空

十五番

左　勝　従二位基良

うしや猶ことゝも山高き風猶のこさましひにかくれぬるその

右　保季朝臣

忘れ行人の心そあらくよ夢をも秋ならへいかなる木末に

我こそは秋のうはきそかけても露もこほれぬ夕風

十六番

左　勝　右近衛中将通方

さしやるなさん花の姿たにもせぬ屋まの夕くれ

右　兼隆

たちかへるかけにたちかはる霧のなかれて空はひしけき

笑たる月それて空とはひとくこそ霧をのみ

十七番

左　宰相中将経通

右　勝　藤原康光

出ぬや根る袖の露の雲にたにしてそうつらなくらむ

しられしな涙よこえよすむ水の下安からぬ心かはりを
契りおきて涙さへこえよすむ水の心あさくのみまさる袖哉

十八番

左　玄濤内侍

侘つゝも小松や梅をうゑて浦にあるなかねなれはこそ袖乃月哉

右　勝　菅原淳頼

物おもふ人はいつはりこそ小松にある根さへいかにあるこの秋
そわかれの根の松も波こえよあけの身の暁乃こゑ

十九番

左　持　七条院権大夫

ふかゝらはいかに涙のみちと人しれてしられぬの下みちに

右　範基朝臣

わか恋はつれなき波をせきとめてあふせもしらぬなかのたえま
人しれぬおもひのほとに涙のみこほれておもふかれ下道

二十番

左　俊成卿女

いつはりや夢ちにとてもなれしなかに別れし人の面かけ

右　勝　光家

しのふまとあやなき涙にぬるゝ袖のぬれつゝさつらき袖やいかにせん
人しれぬ袖のしつくを鳴なくの絶ぬなみたそしらぬ

二十一番　深山雨

左　勝　女房

はせしくれ外山も今はゆきさこちるみ山の秋乃村雨ぞふる

右　雅経朝臣

嵐ふきひたつよもすがらぬ山人の袖も時雨のゆかりにて今はゆかくれ

二十二番

左　権大納言

これは乃雨の夕暮空にみえくれてこゝ山乃ゆきを露の泪

右　勝　行能

月のくにとはれん山をたづねきて木の葉の雨乃ゆふ暮

山人の神代のまゝにふる雨の時しも雨乃あさこと見るゝ

たつぬへき松の葉も露にそぬれて神なつき楢乃秋風

二十三番

左　勝　従二位家衡

嵐てふくれさそふ嵐乃吹すさふかけの秋のむらさめ

右　国通朝臣

雲かゝる山のおくの雨そそきて中にぬれてさへいくたひ

二十四番

左　持　左近衛中将家良

時しさへおもむきにぬれて志ぐれもかはらぬ秋乃村雨

と暁山里は嵐乃吹すさふに木の葉こそねさめなりけれ

右 忠定朝臣

うき身にて秋かせにふる時雨まて枕にしみぬ山のおく哉

思ひやれいつまて深き山乃おくにしあれたる宿を住て

二十五番

左 勝 従二位基家

夜すからくらき更のなかつきくるも迷ひぬ山のおくのかねの声

右 保季朝臣

杉乃いほはあれてもそはぬ待しくれはいかにむかしの山とすむらん

杉のいほに袖を涙ぬしくれはいつるかや山乃奥ふかく人も踏み見ゆ

二十六番

左 持 右近衛中将通方

おのれはゝみちを隔るしくれのゝふるみ山に誰かきくらん

右 兼隆

あま雲の山はよそなる奥乃つゝ不時雨をききしらぬ人もなし

絶えくもり秋のしくれも常人つねなるみ山そ見なれ奥

二十七番

左 宰相中将経通

村雲は風も吹あへとかつはれやゝる間の空も時雨すくなし

右 勝 藤原康光

志らくものたえまになびく青柳のかつらき山は風なかりけり
青白のかつらの山は流れてもなく康のねそむらしきかれ

二十八番

左　勝

外山にて淋しき滝の村雨にさそはれてあさせんゆふくれ

玄濤内侍

右

林の葉はさかつきしれならよ秋の流れて山ちに雨ふしたりけり
村しくれそよきて奥の夕くれのさひしさまさとんすそらに

菅原滿頼

二十九番

左

七条院権大夫

ふもと又霧はれにけりあへていく村さめのみゆるまにかゝれく

右　勝

能基朝臣

松かさこれ淋しさのうへにかさねけり遠山の端の林ゆふくれし
みるまゝにいく村雨数もなく猶々山乃ゆふくれの雲

三十番

左

俊成卿女

そむけとも涼しきかなよ林の下葉かる村雨あへぬ袖のみ

右

光家

志くれつゝ山ちを埋む雲はれて本の林の村雨
袖乃雨はれてもなほ志めりて涼しき村雨の雲